

編集者ひとりごと1

中原初代代表の忘れられない言葉「運動はずっと続けていかなければならない」

中原義隆初代代表の役員会の発言で、深く感銘を受けた言葉があります。

中原氏は幼児期の病気により下肢にマヒがあり、現在も松葉づえや車いすを使用されていますが、福岡市の障がい福祉の向上に大きく寄与されてきた方です。

「自分たちが生きてきた時代は、今から考えると、差別をされたことや嫌な思い、悔しい思いをずいぶんしてきた。しかし当時はそんなものだと思っていた。

その後、自分たちは社会をよくするための活動を長く続けてきた。差別をなくすことやバリアフリー、ユニバーサルデザインという考え方など、社会はずいぶんよくなってきて、今、その結果がある。

「だから、運動は、ずっと、続けていかなければいけない」

この言葉に深く感動したのでした。

編集者ひとりごと2 子どもたちは合理的配慮の天才！？

約30年ほど前のことです。ご近所に2歳～小学生の子ども集団があり、つるんで公園や路地でよく遊んでいました。おにごっこやだるまさんがころんだ、夏の夕方には花火を持ち寄って暗くなるのも待てずに火をつけたりして楽しく遊ぶ姿は実にほほえましいものでした。

その集団には車いすの子や、2歳の幼児も混じっていました。お隣のお兄ちゃんが車いすの子と一緒に逃げる、2歳の子は年長の子がおんぶして走る、おにごっこでは車いすや2歳の子にはハンディキャップを与えて他の子どもと同じくらい逃げやすくする、花火の時は火をつけてから渡したり、手を添えて危険がないようにみんなで配慮を怠らない、などなど、**皆で話し合いながらルールや工夫を自在に生み出し、実践し、誰も淋しい思いをしないような配慮をしているのでした。**大人が指示したことではありません。子どもたちはインクルージョンの精神を生まれつき備えているのではないかと感じてしまいます。

地域で生きていく環境の中に、障がいや性別、年齢、肌の色、その他もろもろの多様な特性を持った、自分とは異なる特性の人がいて、そのとき出会った人とどう生きていくか、どう楽しみを共有していくか。そのようなことを当たり前を受け止め考えていく。子どもの時から身近に触れ合って、遊びや学校生活を体験し、もろもろのことを受け止めながら互いに成長できる環境があることが、差別のない社会への、一番の早道だと信じています。



私たち大人も子どもたちの良いお手本になれるよう、「誰も排除しない」「他者を受け入れる寛容さ」を身につけていきたいものだと思います。